

伝道最前線を支える教学上の試論

・・・・・・・・構造教学の提起・・・・・・・・

堅田 玄宥

一、総 説

宗門では、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要事業の一環として平成二十三年末に教学シンポジウム「世界に響くお念仏」が開催されました(Ref)。学術的見地からは、これに先立ち前世紀末に外部世界と直面する二大国際シンポジウムを経験しました。一つは、通称「ハーバード・シンポジウム」、今一つは、宗門内でもある北米開教区開教百周年記念シンポジウム、通称「親鸞とアメリカシンポジウム」であります(Ref)。

両シンポジウムが宗門に明らかにした課題には少なくとも次の二点があったかと窺われます。

第一に、海外開教の基盤となる伝道教学が未確立であること(Ref 永谷孝昭 p161)

第二に、絶対他力という親鸞聖人が到達された宗教体験について、教学的にはその結論のみを宗門内のみに通じる用語と表現形式で表すに留まっており、それでは真宗思想の国際化の試みに支障があること(Ref 永富正俊 p75,78)でありました。

後者は、阿弥陀如来から本願力廻向される絶対他力の働きに行者が目覚める転換の過程を明らかにすることをこそ求めたものであり(Ref 永富正俊 p75) それが実現されてこそ異教徒との対話も可能になる点に鑑みれば、実は、両者は軌を一にする課題であることにもなります。

しかるに、浄土真宗にとって最も重要な問題は、人は如何にして信を得るかであるのに、宗学ではこの獲信のための理論が体系的に構築されていない(Ref 信楽 峻磨 p18、岡 亮二 p22 等、は奇しくも Ref の研究叢書と同年の発刊であります)と指摘されたまま今日に至っております。因みに、「信心正因 称名報恩」の御法義(ご常教)の視野は、信心獲得以降に限られています。

体系的な伝道教学が未確立のままでは、未信の行者に不案内で伝道最前線を担う個々の開教使徒に徒に負担を課し、座禅の求めに応じて仏性を磨き出す行業に傾けば(Ref p197)、自性唯心に沈んで(Ref 『信巻-別序』)もはや浄土真宗の御法義ではなくなる懸念なしとは申せません。

前記シンポジウムでは実に貴重なアンケート結果、ご指摘がありましたので、本論では、まずこれらに耳を傾け、SWOT分析で情報分析し課題を浮き彫りにし、解決の方向性を模索し、以て、雑行雑修の現実社会の中で人生の苦悩を抱えて呻吟する現代人(み教えを聞く側)の立場に立って、本願力回向のみ教えに目覚める道行きを見出さんとするものであります。

その表現に当たり、衆生の活動層(第二層)の下には、衆生の状態によらず願力が働き続けていて下さる(第一層)と構造化して捉え直し、浄土真宗の特徴たる「本願力廻向」を両層を繋ぐ関係性(救済軸)であると押さえて、衆生の信心獲得に至る道行きを促す教学上の試論を提起するものであります。

蓋し、宗祖親鸞聖人ご自身には、体験的に信心獲得に至る「三願転入」という尊い道行きがおりだったのであり(Ref)、他力信心獲得前の行者(未信段階)ではまずお念仏をお勧めになったことであります(Ref)。

二、第一章 構造教学の提起

二の一、伝道上の課題認識

伝道学の源をお訊ねすれば、「自信教人信」(Ref)を挙げることができ、布教使は、専ら「仏徳讃嘆」の下に研鑽を積みます。ところが、「人は如何にして信を得るかという獲信の構造についての理論が体系的に構築されていない」(Ref p18、 p22)と指摘されたまま、最近の研究成果にお訪ねしても、専ら伝道者のあるべき姿の教義学的な論述に留まります(Ref)。

そこで、改めてキリスト教との対比でみてみますと、

- ・ 海外開教の基盤となる伝道学の学問体系が浄土真宗の中に備っておらず(Ref 永谷孝昭 p161)
- ・ 厳密な意味での「神学」は真宗学の学問的分野では未構築であり(Ref 永富正俊-武田龍精 P131)
- ・ キリスト教神学の有する実践神学の中心たる「伝道学」に該当する確固たる分野が無かったのが真宗学の方法であった(Ref 深川宣暢 p237)とあり、
- ・ 真宗学における実践的な研究としての伝道学の進展は今後に求められている。まず必要なのが、真宗の教義において「伝道」を位置づける作業であろう。この事が踏まえられていなかったが故に真宗伝道学が大きく進展しなかったと考えられる(Ref p238)と指摘される通りであります。

深川氏の論述には、最後に、真宗伝道学の方法の対象として「人間存在の状況認識と分析」(Ref p245)が目にとまりますが、その内容に踏み込んだものではありません。

結局、「伝えられ手側に立った伝道教学」は、浄土真宗では存在しなかったことになるのであります。これは浄土真宗の弱点であり、このリスクを次世代に引き継ぐべきではありません。

そこで、不肖は、喫緊の課題である「御法の伝えられ手側」の信心獲得に至る道行きに焦点を当てた浄土真宗の伝道教学の構築について一愚案をご提起し、以て、宗門内に論議の機運が盛り上がり、宗門積年の課題「体系的な伝道教学の構築」が果たされんことを念願するものであります。

二の二、SWOT分析による分析法について

そこで、伝道最前線情報である前記三シンポジウムでのご意見を柱に「SWOT分析(Ref②)」により課題の再認識を行いました。SWOTの「S」は、内部強み(Strength)、「W」は、内部弱み(Weakness)、「O」は、外部機会(Opportunity)、「T」は、外部脅威(Threat)を指します。

分析手法は、第一に、組織内外の状況(Context)分析を行うに当たり、組織内外の状況要素を四象限の内部強み、内部弱み、外部機会、及び外部脅威に分類しつつ情報収集します。

次に、SWOT分析(リスク、機会分析)を行います。各情報に分類を付しグループ化し、各象限内での情報の著しさを評価して順位付けします。ここでは、「重要度」「施策有無」「規模」の三要素につき各最大三点評価を行い、施策策定を阻む要因があればマイナス評価します。最後に全て掛け合せて算出した評価点に順位付けします。評価には任意性が入り得ますが何度も見直し同一グループ内での相対評価で客観性を担保します。尚、当初「強み」に分類したとしても「マイナス評価」になるものは弱みの性格を有することになり、この手法の客観性を担保します。

最後に、四象限をたすき掛けして洗い出す「クロスSWOT分析」で戦略(論文テーマ)を策定します。因みに、「脅威に学んで弱みを克服する」や、「強みを活かして機会を捉える」等の観

点から明確化することになります(次図をご参照下さい)

SWOT分析(リスク&機会分析)

内部環境	【強み(strength)】	【弱み(Weakness)】
外部環境	【機会(Opportunity)】	【脅威(Threat)】

クロスSWOT分析

	機会	脅威
強み	<ul style="list-style-type: none"> ◆機会に対して強みを活かすには ◆強みを活かして機会を捉えるには ◆(例)宗門内の新たなご着想を手掛かりとして、伝道最前線を”支える体系的な伝道教学構築”の機運を盛り上げる ◆(例)浄土真宗の強みで機会を捉え活かすべき <ul style="list-style-type: none"> ①”Family Friendship Busshism”の強みを活かす ②”現生性(現生正定聚)”を強化すべき ③”妙好人”の生き様を積極紹介すべき 	<ul style="list-style-type: none"> ◆脅威でも強みでチャンスにするには ◆脅威に学んで、弱みを転じ、強みとするには ◆(例)新興宗教の積極果敢な伝道の営みに学んで、 <ul style="list-style-type: none"> ①まず自坊のお聴聞活動を活性化すべき ②次に、外部現代社会に展開すべき *親鸞会はまず伝道の場作りから始めている
弱み	<ul style="list-style-type: none"> ◆機会を弱みで逃がさないためには ◆強みを弱みで消して機会を失ってはならない ◆(例)”信心は一人しのご”で”社会性”の目を摘んではならない。「常行大悲」を積極的に掲げる ◆(例)”報恩行”見直しの可能性について <ul style="list-style-type: none"> -ご常教では、称名は信相続行に押し込めている ①称名を声の勅命に聞遇する機会とご案内すべき ②”報恩行”は”常行大悲”に拡大解釈すべき 	<ul style="list-style-type: none"> ◆脅威と弱みで最悪事態を招かぬためには ◆脅威に学んで弱みを克服するためには ◆(例)キリスト教に習って実践神学の中核たる”体系的な伝道教学”を確立すべき ◆(例)前項の目的達成に向けて、”批判的究明の西洋的方法論”に習って積極果敢に取り組むべき

尚、折角の南米開教区菅尾 康健開教使の Context 把握の貴重な労作「北米浄土真宗開教史のドキュメンタリー映画 Streams of Light」は書き起したくも暇無く割愛せざるを得ませんでした。引用文献 にも小杭氏等の情報が掲載されています。

二の三、ハーバード大学 永富正俊教授の指摘を見直して

「ハーバード・シンポジウム」では永富正俊氏の発表が鮮烈な印象を残しました。氏は、「浄土真宗の宗学は、絶対他力の結論のみを内向きに通じる表現をしているに留まる。その壁を打開し、自分の行動だとしていた称名の実践が本当は他力の働きに他ならないと覚醒する転換の過程こそが語られねば、真宗思想の国際化のあらゆる試みは功を奏しない」と指摘されたからです(Ref p75)。具体的には、信楽氏の称名解釈 (Ref) を長老格の稲城氏が宗門唯一絶対の教学とご常教の立場から糾弾した書籍 (Ref) に米人宗教史学者が着目し失望して永富氏に与えた示唆に端を発します。信楽氏、稲城氏共に還浄された今こそ是に光を当てたとしてもお二方にはお浄土からにこやかに許し戴くかと存じ論を進めさせて戴きます。

信楽氏が「初門位の信心から究竟位の信心に至る信心の道は、称名・聞名の道だ」と述べられた(Ref)のに対し、稲城氏は「それは、自力と他力とを混同した見方で許されない。行巻の称名は、名号法が衆生の上に活動している相であって既に信心が備った如実の称名だからである」と批判されたのであります(Ref P11)。是より、ご常教は、信心獲得以降に視野を限定していることが判ります。

二の四、SWOT分析で事実関係の確認と戦略を探る

SWOT分析から明るみに出た点を例示しますと、第一にお聖教が翻訳され西欧学者の科学的研究に晒されて行ったとき、果して、宗門は伝統と権威だけで立ち向かえるかという懸念(Ref p39)であり、

第二に、精力的な聖典翻訳で、西欧社会に提供する浄土真宗のText情報量は足りてはいても、異文化とのコミュニケーションは、**宗教的洞察を記述する状況情報(Context)**が第三者に理解できるように伝えられて初めて可能になる(Ref p72)のであり、

第三に、伝道教学が未確立だと指摘された((Ref p161他)ことでもあります。

次に、クロスSWOT分析により、例えば、次の戦略案が例示できます。

第一に、「**脅威に学んで弱みを克服する**」には、批判的究明の西洋的方法論に習って、“体系的な伝道教学確立に取り組むべき”となるのであり、

第二に、「**強みを活かして機会を捉える**」ことであり、それには、因みに、

- ・ 「本願招喚の勅命を前面に押し立てる御着想(Ref 前門様)」や
- ・ 「お木像を仰いで大慈悲に導かれる御着想(Ref 勸学寮頭)」を手掛りに、“伝道最前線を支える体系的な伝道教学構築の機運を盛り上げよ”となるかと窺います。

さて、教学は、伝道と有機的に関連し伝道現場で鍛え上げられます。伝道現場では、どうしたら浄土真宗のみ教えが受け入れられるかが課題だからです。北・南米では時代の要請に応答できる教学提起の積極果敢なご尽力があり即伝道現場で試されます。国内人はまず斯るご尽力に敬意を払うところから始めねばなりませんまい。 記

例(北米)山岡 誓源元北米総長の「6 Aspects」(Ref)・・・カウンセリングに端を発する。

(北米)小杭 好臣シカゴ中西部仏教会開教使(元総長)の「**禅信サンガ**」(Ref p197)・・・積極果敢にプラクティスを前面に据え、継いで真宗の方へ導こうとするものである(ケネス田中Ref p157)。

(北米)オレンジ郡仏教会原田マービン開教使の「**Meditation(瞑想)**」・・・聴聞の準備(Ref p39)。

(南米)菅尾 康健開教使の「**Streams of Light**」・・・北米の浄土真宗開教史のドキュメンタリー映画
(Context把握) URL : <http://streamsoflightmovie.com>

(南米: ロンドリーナ本願寺)み教えを織り込んだ「**本願寺音頭**」・・・仏教青年向けのバンド機能「お寺依存(oteraisao)」が若者を引きつける(2015/9/19 日系社会ニュース) URL : soundcloud.com/haruhisa-katata

二の五、二層構造の「構造教学」着想の背景とその内容

伝道最前線は、国内外を問わず人々の人生の種々相の一コマ一コマにあるかと窺われます。

- ・ 先頃刊行の『本願寺白熱教室』の中にあつて「教えを床の間に飾っておいてよいのか」は、異

色の輝きを放っていました。これは、仏法に全く不安内で京女に入学してきた学生達に知識として教えた素朴なご本願が彼女らの人生の瀬戸際に畢竟依となって姿を現すことが少なくないというお話でありました。事例は、伝統的な安心の要を全く知らない者にも阿弥陀仏の大悲は浸透する証左となるとご指摘でありました (Ref 徳永一道 p84)。

・当院では偶々次の様なケースに遭遇致しました。あるとき「ご本尊を拝まして欲しい」とお訪ねになり、実に丁寧に合掌礼拝された直後にそのお方から発せられたお言葉が「**どういうご利益がありますか**」という問でありました。これに対して「信心一つで摂取不捨の利益に与ります」とお応えするにも長い説明になります。信心が「私が信じる」次元で理解されます。

因みに、北・南米では「信心を最初に掲げる」といづかれ、Fundamentalist は警戒します。

ここでは「貴方は、お気づきではなかったかもしれませんが、貴方を足の向くまま当院に運ばしめ、掲示板の法語に目を移らしめ、ご本尊を拝みたいと思わしめ、ご尊前に額ずき合掌礼拝せしめた大きな力が働いていたことでしょう。私達の日常の中に、既にして私をお導き下さる如来様大悲が働いていて下さるのです。その大悲に促されて貴方が一步を踏み出されたところに大きな意義があったのではないのでしょうか。そのように気づかしめられるとき、既にして貴方は如来様の懐に包まれているのです」とご案内するのが現実的です。

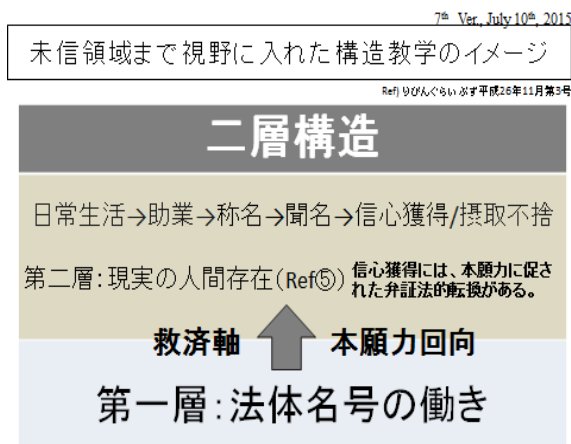
これらの事例が物語るところは、伝道教学としては浄土往生の正因たる安心の要だけを説いて終れりとしたのでは世の人々に不親切ではないかということでもあります。如来の本願は、実は人々の人生の種々相の上に働いて下さると窺われるからです。寧ろ、雑行雑修の人間世界で苦悩を抱えて生きざるを得ない人々の現実に寄り添って浄土真宗の特徴である「**本願力回向**」の願力が常に働いていて下さることがご案内できなくてはなりません。

これが構造教学発想の原点であります。本願力は、本願成就の法の真実の世界から、人々の現実平面を貫く形で衆生の状態によらず届いていて下さると受け止めるのが自然だからです。

本論発表時に提示された質疑「**勅命はいつの時点から勅命か**」についても「勅命は、如来正覚のその時点から勅命として発せられているのであり、勅命が勅命と受け止められるのは、願力を聞く疑蓋無雑のそのとき (Ref 『信一念-時剋釈』) である」とご回答申し上げたことでもあります。

顧みれば、北米開教区元総長の『**6 Aspects (六位相)**』も、素朴な伝道最前線でのカウンセリングの現実体験に立脚していました (Ref)。

これらは、行者の未信領域をも含むお育てとお救いの道行きを示唆しているのですから、二層構造で表し得るかと窺います。本願力は、本願成就の法の真実の世界から、衆生の状態によらず届いていて下さると受け止めご案内することになるのであります (イラストをご覧ください)。



第一層に法体名号(願力)の働きを、第二層には衆生の日常生活上での信前信後の道行きを担う「現実平面・時間軸」を位置づけます。「本願力回向」の働きが両者の関係性であり、これを「救済軸」と捉えます。救済軸は、衆生の状態によらず(時を選ばず)働いて下さっています。

宗祖は、「願力を聞くによりて報土の真因決定する」と仰せであったのですから、広く四十八願の願力(中心は第十八願の名号)を聞いて衆生がお救いに与るのだと窥えます(Ref『六字釈』)。

なぜ、第二層を設けたか。伝道教学の為には、衆生(御法の伝えられ手側)の現実次元(人々の耳目に昇って直接関知せられる経験の世界)を手掛かりとすることを疎かにできないからです。尚、時間軸を介して現行と種子層間の関係性を論ずる手法は、唯識に伺えます。

出拠としては、宗祖がご自身の実践的必然として示された「三願転入」の法理を頂戴致します。「三願転入」の法理(Ref)こそは、法の働きに支えられた「諸行往生 自力念仏往生への回入、自力念仏往生 他力念仏往生への転入」の弁証法的転換過程を表すと窺われるからです。就中、「『果遂の誓、まことに由あるかな』は、自力念仏に滞っていた私親鸞を第十八願へと転入せしめたのは、第二十願の願功であったと感佩されたものである」との先哲のお言葉(Ref 梯実圖 p456)にある通り、「転入」は、本願力の促しであったことを示す証左であります。二層構造の第二層の歷程を具体的に表すものに他ありません。

ここで、提起させて戴いた「構造教学の効用」を概観しますと、

第一に、第一層に備わる名号(願力)の働きを聞信するを安心の要としつつも、往因願以外の悉皆金色の願等の素朴な願成就の願力を聞く契機にまで拡張して頂戴できるかと窺います。

第二に、第二層は、第一層の願力の働きに支えられていればこそ、衆生に恵まれた雑行雑修の様々な道行きも遂には他力発見に至る弁証法的転換の道行きとなることを表し得ます。その時点で「往生」を目標視できない現代人の営みも諸行往生以前の事態と受け止められます。

第一層からの本願力回向によって如来先手の働きを表し得るかと窺います。

このように頂戴して参りますと、曾て信楽先生により御提起戴いた「初門位の信から究竟位の信に至る信心の道(称名/聞名の道)」(Ref)の意義を改めてお聞かせに与ることとあります。

自力か他力かの実体的二元論の「信の解釈」では到底現代精神には訴ええなくなったとの武田氏のご指摘(Ref P39)にも応え、或いは、稲城説に対してアメリカ人宗教史学者が示した落胆をも回復できる契機を提供し得るかと窺います。

第三に、浄土真宗では、信心は一人しのぎで善をなすことが救済の条件ではないとして積極評価されなかった「社会的/倫理的活動」(Ref p72)も、「常行大悲」の益を第二層に据えることでその意義を頂戴できます。凡そ、日本文化は、共同参画するコミュニティでの活動の型の実践を通して精神獲得を促してきたのであり、お聴聞のコミュニティが息づいているならば、先達の後ろ姿や妙好人の生き様によって導かれるからです。「報恩行」を「常行大悲」として広く捉え直すべきだとは、ケネス・田中氏のご指摘でありました(Ref p158)。

初一念は、疑蓋無雜の阿弥陀仏の御はからいに帰属する為、信心自体は直接お勧めできなくとも、「常行大悲」の実践を通して逆觀的に信心獲得に馴染むことができるかと窺います。「逆觀」は、四諦八正道や貞慶の心要鈔の構造(Ref)にも見る如く仏道の伝統の一つであります。

二の六、第一章の結論

構造教学の提起によって従前の宗学上の課題を克服できます。それは、

- ・ 衆生の日常へも視野を広げた体系的な伝道教学確立の可能性が垣間見えたことであり、
- ・ 本願力回向の浄土真宗の特徴を可視化する教学の現代化に通じるからです。

三、第二章、伝道教学の萌芽に鑑みて

先頃ご提起下さった伝道教学の萌芽には次の二点があるかと窺います。

第一に、本願招喚の勅命を前面に据えた伝道教学の提唱(Ref)が挙げられ、

第二に、お木像本尊から仏の大慈悲へ繋ぐ道行き(Ref)であります。

三の一、本願招喚の勅命を前面に押し立てる

前門様は次の様におっしゃいました。「南無阿弥陀仏」の御念仏は救って下さる阿弥陀様に感謝御礼の気持で称える御念仏になるけれども、救って欲しいとも救われたいとも思っていない人に「有り難う」と言えと言ってもそれは伝わらない。現代人には「南無阿弥陀仏」は、阿弥陀様が私を喚んでいて下さるお喚び声だと伝える方が理解され易い(Ref p33)と

「本願招喚の勅命」の出拠は、「六字釈」です。まずご常教下で懸念される課題を吟味します。それは、第一に、勅命は、未信の行者に及ぶや否やであり、第二に「声のお喚び声」のお勧めは、ありやなしやであります。

ご常教では、これをどうご覧になったのでありましょうか。空華学派最後の学轍と称された桐溪順忍氏は、勅命の及ぶ範囲につき、「念仏から信心への念仏」は、「称名」であるが、「信心より念仏への念仏」は、自分の口から出る称名であってもそれは自分の口を借りて出て下さる阿弥陀如来の「招喚の声だとする」とお示しでありました(Ref p41)。ここでは、ただ事実関係のご紹介に留めおきたいと存じます。

そこで、改めて経釈のご文に立ち返ってお訊ねしてみますと、

聖人の「六字釈」は、善導大師の『観経』の「別時意会通」の「いまこの『観経』のなかの十声の称仏は、すなはち十願十行ありて具足す。いかんが具足す。」の「六字釈」に発します。

『観経』のなかの「十声の称仏」とは、第十六観「下品下生」の称仏であります。

しからば、「六字釈」の原出拠は、念仏 (= 心念) 叶わぬ者へのお勧めですから、未信の行者を対象とする、声の念仏のお勧めであることとなります。但し、善知識に促されて称えたのですから「さようか」と頷いた素朴な無疑心はあったといえることができます。

【論点】(問)「勅命」とは、勅命の勅命たる意義が判って初めて勅命ではないかに対して(答)「意義が判る」とは、衆生の意業「信(衆生の認識ですから第二念)」に昇る事態です。されば、是を以て「勅命」を規定するのは不遜かと窺います。「勅命」は、本願成就し如来様のお手許から発せられた時点で既に勅命だったからです。これは、曾て、大行が衆生の状態によって変わることがないとされた岡 亮二氏の論理と軌を一にします。「勅命」の文証の原点が観經第十六觀の未信の者に対する口称念仏のお勧めであること(「転教口称」)から明確かと窺います。

「いつの時点から勅命は勅命となり得るのか」との疑問が生ずるのは、願力の働きと衆生の活動の次元を一次元でみたことに基づく事態であり、これは、如来様の働きを本願力回向として衆生の行業と独立交差させる二層構造の視点の導入によって解消されるかと窺います。

三の二、信前念仏お勧めの根拠、「御消息第二十五通」、正像末和讃第六十六番 誠疑讃

「信心正因」を力説された聖人が、何ゆゑ晩年、お弟子様方に念仏往生をお勧めになったかについては、如来の喚び声として称名を捉えることが最も大切だとお考え遊ばしたからであろうと言われます(Ref 桐溪 順忍 P48)。勅命に聞遇するには、実践面の大切さを窺わせるものがあります。

御消息第二十五通には「往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候ふべし。わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏のご恩をおぼしめさんに、ご報恩のために御念仏ころにいて申して、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。」とあります(Ref)。これは、「信後の称名報恩」と一連に、往生不定の行者にはお念仏 (= 信前念仏) をお勧め下さった宗祖直々の御文(一級資料)であります。

以て、林 智康氏は「往生不定の人は自分の往生を思って念仏を称えるべき」と仰せになり、玉木 興慈氏は、これを秀逸と讃え、親鸞自身と真摯に向き合うこともこれからの真宗学の課題と結ばれました(Ref p301)。

正像末和讃第六十六番 誠疑讃では、「自力の行者も、称名念仏励むべし」と仰せであります。疑心を誡められる誠疑讃でのお念仏のお勧めこそは、信前念仏お勧めの証左かと窺われます。

信心の人におとらじと 疑心自力の行者も
如来大悲の恩をしり 称名念仏はげむべし(正像末和讃第六十六番)

三の三、お木像は仏の大慈悲のあらわれであること

次に「浄土真宗のご本尊は、海外開教のためにはお木像を本尊であるとするのが得策である。なぜなら、お名号の意識は長い説明になり、音訳すると意味不明の呪文と受け止められかねないからである。その上で、お木像の本質は、阿弥陀如来の大慈悲を表すと説明するのが開教使の責務である」と徳永一道氏は仰せになりました(Ref p65)。

定善觀でまみえる仏(観經第九真身觀)の本質は、「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を撰す」にあり弘願真実のお姿(第七華座觀)を仰ぐ道行きを窺わせます。

されば、お姿からお喚び声にご案内する仕方は、縁あってお御堂に歩みを運ばれたお方に弘願のみ教えをお伝えする伝道最前線に有効な論理だったかと窺われます。

宗祖は、「六字釈」で「発願回向といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり」と仰せでありました。「衆生の行」は、如来様が本願成就し廻向された行だったのです。また「出体釈」で「大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」と仰せ下さいました。梯 實圓氏常の仰せの通り、この御文には主語がありません。主語のない日本語の特徴に鑑みれば、如来行がそのまま衆生の行になるのであります。「出体釈」に衆生の状況 (Context) に限定がないことは、その働きは、未信の行者にも及ぶことを意味します。

されば、称えれば、直ちに聞こえて下さる音声こそは、聞名ならしめる本願招喚の勅命を意味する“宗教哲学上の哲理”であると明確に認識すべき時かと窺います。

以て、旧くは家永氏により投ぜられた念仏呪術説も学術的に払拭できるかと窺われます。

目に見えぬ法性法身が五感の群生海に現れ給うたお名号の具体的な働きだったからです。お名号は、ふとお姿を仰ぎ見ればこの目で仰ぐことができ、口称すれば耳に聞こえて下さるからです。

信前念仏が実践上必須であることは、浄土和讃冠頭讃にも示されてあります。冠頭讃では、称名念仏が真っ先に謳われ、続いて信心まことにうるとあるので、信心獲得に際しては、念仏が前提になります。ここで、「信心まことにうる」を「弥陀の名号を称へる」より先に位置づけることの是非については、先哲のお言葉が残されてあります。瓜生津隆雄氏は、「親鸞聖人は、実践を重視されたお方であるから、『弥陀の名号称へる』というのが先になければならない。信を先にすると観念の信心になってしまう」(Ref②)と仰せであり、「声につきて決定往生の思いをなすべし」との元祖の御文を引きつつ「念仏のない信心では、観念論に陥る」とは、梯 實圓氏の常の仰せでありました。

奇しくも、下田正弘氏は、前回大会で「浄土仏教経典は、諸伝統の統合という形で出現したものであり、仏名を称えることに集約され、遂に純粋な言葉となって現れた。経をよむとき、音になり、声が見れる。佛の世界が見れる」と結ばれました(Ref②)。宗門外からの斯るご指摘は瞠目に値します。広讃と略讃は、決して別物ではなく、お念仏するとき、音になり、声が見れる。衆生は、その声、名聲にまみえるのだとお聞かせに与ることができることかと頂戴できます。

第十七願の諸仏の「咨嗟称我名」と「無碍光如来のみ名を称する」衆生の称名とが何ゆゑ同位になるかは、全く仏の本願力回向によるからであると窺います。こうして「称えれば直ちに聞こえて下さる名聲こそは、本願招喚の勅命であり未信の行者にもその功德は及ぶ」とご案内できるかと窺います。

三の四、聞信不具足から聞信具足に恵まれる道行き構造をお訊ねして

折角ご提起戴いた伝道教学の萌芽に、衆知を結集して体系的な伝道教学にまで育て上げるべきは、宗祖のみ教えに深く頭を垂れる者の勤めでなくてはなりません。課題は、如何にして「聞信不具足」から「聞信具足」に恵まれるかの道行き構造の明確化であります。

ここで、宗祖の信巻菩提心ご自釈(註釈版 P246)の「信不具足/聞不具足」は、願力(第一層)回向の働きに支えられた凡夫次元(第二層)の構造の存在を示唆し、凡夫が未信の領域からお育てに与り、遂に聞信具足する道行きを示唆して下さるかかと窺います。

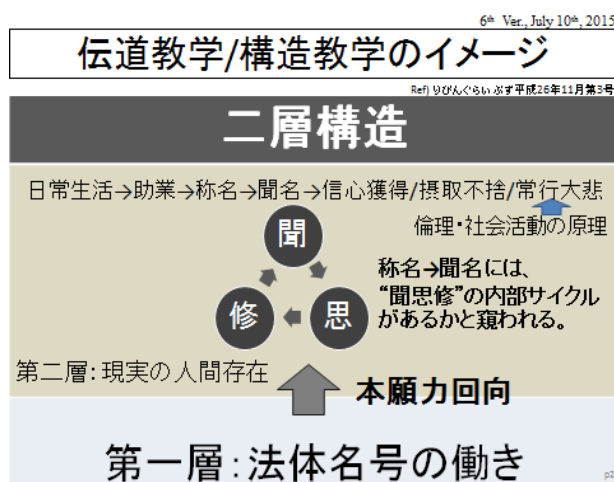
最後に、未信から遂に聞信具足する道行きについて仏説観無量寿經の御文に窺わせて戴きます。

観經流通分に聞く「聞思修サイクル」

「もし、善男子・善女人、ただ仏名・二菩薩名を聞くだに、無量劫の生死の罪を除く。いかにいはんや憶念せんをや。もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり」(Ref 観經流通分)。これは「聞名 憶念 念仏」の流れであり、二大理念が読み取れます。

- ・ その一は、「念仏するもの」が道行きの到達点にあることです。これは、得者と共に実践道を歩む姿を重要視しているからだと窺えます。
- ・ その二は、「聞名 憶念 念仏」は、「聞思修」のサイクルであり、upcycle(聞思修を繰り返すうちに終に聞信具足に恵まれる事態)を示唆します。「憶念」だからです。

以て、聞信不具足/具足の難題と思われたものは、却って「聞思修」で衆生がお育てに与り、遂に恵まれて聞信具足する「聞」の初一念に導かれる構造を示して下さるかと窺います(イラスト参照)。



浄土真宗では絶対他力の救済という結論に立脚する教学が歴史的にも精緻を極めたのに比して「現実平面・時間軸」での研究は寥々たるものがあります。折角、前門様や勧学寮頭から伝道教学の萌芽ともいふべき御発案が示されたのですから、これを契機に体系的組織的取組が為されるべき好機かと窺います。

四、結 論

- ・ 浄土真宗の伝道のためには、未信の行者にご案内し、異教徒も対話に引き入れ「凡夫が如何にして未信領域から聞信具足するに至るかの道行き」を示す体系的な伝道教学が確立されねばなりません。
- ・ それには、衆生の状態によらず(時を選ばず)働き続けていて下さる願力に支えられて、機が熟して聞信具足するに至る凡夫次元の営みを捉える構造教学が存在するかと窺われます。
- ・ 「本願力回向」は、第一層と第二層を繋ぐ「救済軸」に沿った関係性であると窺われます。
- ・ 第二層は、第一層の働きに支えられ、自力(と思っていたものが)本当のところは、他力(の働きであったと)目覚めるに至る「弁証法的転換プロセス」を表すと捉えることにより、「信前に視野を広げた伝道教学」確立の道が開けるかと窺われます。
- ・ 「社会性/倫理的活動」も、第二層上でのプラクティスとして“常行大悲の益”を手掛かりに謳い挙げ得るかと窺われます。

- ・ 宗祖の信巻菩提心ご自釈された「信不具足/聞不具足」は、願力の回向に支えられた凡夫次元の活動の構造の存在を示唆し、凡夫が未信の領域から遂に聞信具足する道行きを表し得るかと窺います。
- ・ 本願招喚の勅命の原出拠は、観經第十六觀にあることから、原点は、未信の行者を対象とする、声の念仏のお勧めであることとなります。
- ・ 観經流通分にお訊ねすれば、衆生は、お聴聞でお育てに与る第二層中のサイクル上で「聞信不具足」から遂に「聞信具足」する初一念に導かれる(upcycle) と頂戴できるかと窺います。合掌。

五、出 拠

- ・ 武田 龍精編著：1996 年 **親鸞とアメリカ**「研究叢書『親鸞思想と現代世界』 北米開教伝道の課題と将来 北米開教区開教 100 周年記念(略称「親ア」)
- ・ 武田 龍精編著：1996 年 **親鸞浄土教とキリスト教**「研究叢書『親鸞思想と現代世界』 聖典翻訳と精神文化の移行、国際化と世界宗教対話 ハーバード・シンポジウム、龍谷大学創立 350 周年記念シンポジウム(略称「親キ」)。
- ・ 『教学シンポジウム親鸞聖人の世界 Namo Amida Butsu～世界に響くお念仏～』)
- ・ 『往生礼讃 676』『顕浄土真実教行証文類 化身土文類』『信文類』真仏弟子釈、註釈版 p260
- ・ 信楽 峻麿「浄土教における信の研究」p18
- ・ 岡 亮二 1996 年『教行信証』「行巻」の研究 第十七願の行の解明 p22
- ・ 葛野洋明「真宗伝道における実践論の教義的研究」p21 『真宗研究』49 巻
- ・ 深川 宣暢「真宗伝道学方法論の考察」『真宗学』119/120 合併号)
- ・ 信楽 峻麿「親鸞における称名の意義」『真宗学』55 号
- ・ 稲城 選恵「最近における 真宗安心の諸問題」 龍谷大学・信楽教授の所説に問うー
- ・ 山岡 誓源「第 65 回 仏教文化講演会記録『アメリカでの真宗伝道 - 宗教教育という一つの方法論を通して - 』」
- ・ 徳永一道「開かれた浄土真宗 教えを床の間に飾っておいてよいのか? 本願寺白熱教室」
- ・ 『顕浄土真実教行証文類 化身土文類』『三願転入』註釈版聖典 P412-3)
- ・ 梯 實圓『顕浄土方便化身土文類講讃』p456)
- ・ 楠 淳證『心要鈔購読』p79
- ・ 2013 年 4 月 27 日築地本願寺発行「御門主と前門様のご対談『浄土真宗のこれから』」p33
- ・ 徳永 一道 2013 年 3 月 31 日発行「布教団通信第 35 号」『「無常観」と「平生業成」』p65
- ・ 桐溪 順忍 教育新潮社刊 『教行信証に聞く-別巻』p18
- ・ 『親鸞聖人御消息』第二十五通、註釈版聖典 p784)
- ・ 玉木 興慈「往生一定と往生不定」2013 年『真宗学』129・130 合併号) p301)
- ・ ①瓜生津 隆雄『正真偈偈前の文』すねいる CD
- ・ ②下田正弘 2014/10/7 龍谷教学会議第 50 回記念大会「大乘經典の出現と浄土思想の深化」。
- ・ ③例えば、伊藤達夫著『これだけ! S W O T 分析』
- ・ ④関連解説情報→筆者 Website contents <http://syohgakuji.web.fc2.com/index.html>

付記：伝道最前線の意味するところ

「伝道最前線」は、国内、海外開教双方を視野に入れたものであることは申すまでもありません。本論では S W O T 分析によりまず現状を把握しております。

筆者自身は、国内にあって布教使であり末寺の住職ですから、各地の常例ご法座、教区内讃仰布教大会、福祉施設、他院様の報恩講出講等々の機会がその具体例であります。

自坊では布教使育成と願力による他力念佛者のお育てを第一目標に据えた「お聴聞の会」を毎月営んで五年が経過し、その上で年間行事の報恩講、永代経、歓喜会、降誕会、彼岸会等々が機能するのであります。直接外部社会に向っては、既に十年に近く精力的にコンテンツ発信するHP運営等があり、海外開教区との継続的情報受発信、人々との接遇があります。幸いにも一昨年は、南米開教区を訪問し、仏教婦人大会ご支援のご縁に恵まれました。その節、時の総長様から承ったことは、「近頃はいろんな新興宗教が日本から仏教の顔をしてやってきて活動するものですから、今ではご門徒さん達にとって、何が本当の仏教か判らなくなってきて困っております。」でありました。伝道最前線で宗門が脅威に晒されている実情が読み取れます。これにどう対応すべきかは、宗門に課せられた戦略的課題の一つであります。合掌。

添付資料：「SWOT分析（リスク、機会分析）」の結果

「SWOT分析（リスク、機会分析）」の結果は、「SWOT分析第一表 内部弱み」「第二表 内部強み」「第三表 外部機会」「第四表 外部脅威」毎に付表としました。データ量の多い表は、抜粋して全貌表示は割愛しました。

以上。

SWOT分析第1表-内部弱み(抜粋)

分類	種別・対象	出 典	頁数	要 旨	重 要 性	難 度	宗 門 人	評 価
148	内部弱み 伝道教育	阿部 信 『海外宣教の基礎』 宗社社	161	海外宣教の基礎となる伝道学の学問体系が浄土真宗の中に備っていない。「体系づけられた伝道学」がどうしても必要だがそれが無い。宗社社が体系的に分析し体系付けられたものが見当たらない(永富孝昭国際部長)。	3	-3	3	-27
79	内部弱み 阿部/伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	30	「如何にして信心を獲得していくのか、そのプロセスを認めなければならぬ(信心の6相(1978年発表))。如何にして白人社会に真宗を伝道していくのか、座標を求めてくる白人にどう対応すべきか(山岡啓源北米開教区元総長)。	3	-3	3	-27
171	内部弱み 阿部/学問的方法	阿部 信 『阿部信の学問的方法』 CA 阿部信 (1975)	131	厳密な意味での「神学」は真宗の学問的分野のうちには未だ構築されていない。「神学」とはキリスト教神学が営まれる学問的方法論を指す。キリスト教神学のうちには真宗学者にとって学ぶべき学問的姿勢が大いに異なる(永富正俊-武田龍輔)	3	-3	3	-27
187	内部弱み 伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	18	実践部門とは、真宗求道学と真宗伝道学が考えられる。真宗求道学では、従来、真宗の信心がいかにして成就しえられるかという点について、客観的、理論的に開始と説明されることがなかった(1975年4月信業峰巒)。	3	-3	3	-27
149	内部弱み 伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	22	浄土真宗にとって最も重要な問題は、人は如何にして信を得るかということである。だが宗学はこの獲信の構造をほとんど論理的に語っていない。獲信のための理論が体系的に構築されていない(1996年12月岡 亮二)。	3	-3	3	-27
174	内部弱み 伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	237	キリスト教神学は実践神学という分野を有している。然るに、実践神学の中心となる「伝道学」に該当する確固たる分野が無かったのが真宗学の方法であった。伝道は現在まで説教者の個人的能力に頼る口伝による師資相承であった(深川宣暢)	3	-3	3	-27
52	内部弱み 伝道教育/本題	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	83	悉皆金色の願(第三願)のような素朴な形で明示された本願の大意をよそにして、われわれ真宗者はいわゆる「主体的な」救済の論理にのみ関わってきたのは否定することができない(徳永一進助学寮頭)。	3	-3	3	-27
57	内部弱み 伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	191	浄土真宗の教えは伝わり難い。④伝道教育の教学のあり方に原因あり。三業惑乱以降助業が省かれた(小杭好臣北米開教区元総長)。	3	-3	3	-27
60	内部弱み 阿部/伝道教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	193	浄土真宗の教えは伝わり難い。(宗祖晩年の)法の上での味わいをその儘持って来るとは、不親切であり、思いやり欠ける(小杭好臣元総長)。→◆構造教育の必要性がここにある。	3	-3	3	-27
117	内部弱み 阿部/真宗の短白紙	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	44	(真宗伝道の教学的課題) 仏教一般の伝道が行われており、真宗の教えそのものが人々の宗教的覚悟に結びついておらず、真宗の教えの存在意義を曖昧にしている。真宗の教えを中心とした伝道を支える教学の構築が必要(日系3世:テビット松本)	3	-3	3	-27
161	内部弱み 伝道教育/アラブ	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	339	(真宗伝道上の問題点) 山岡啓源元総長が赴任されたとき二世・三世間に生じていた真宗伝道上の問題点4項目。その3、真宗は行道を説かない。行のない仏教はあり得ない(山岡啓源元総長)。	3	-3	3	-27
181	内部弱み 阿部/信心獲得	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	78	親鸞が自分に力を拒否して絶対他力の中に自己を見出したと言え、彼の宗教体験の結論のみを部分的に表現したに過ぎない。親鸞の自力の拒否を過程的に彼の不断の自覚とみれば彼の体験は文化的境界を越えて判り易く理解される(永富正俊)	3	-3	3	-27
186	内部弱み 阿部/信心獲得	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	75	信楽氏は覚悟に至る過程に注目し、尤もな疑問を投げかけている。もし、全てを包摂する阿彌陀仏の他力のみが祖内するのであれば、救われ人間のみならず動物も救われるのか? (信業峰巒) (永富正俊)。	3	-3	3	-27
155	内部弱み 教学	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	89	(一方、頼みれば) 少しでも「自力的ニュアンス」を与えるような解釈をすれば、研究者の学問的自由を奪うが如き教団の雰囲気の中で、どうして学問の発展・展開が望めるのであろうか(武田龍輔)。	3	-3	3	-27
156	内部弱み 教学	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	89	もはや現代の精神的状況においては、「自力・他力」「仏の側・衆生の側」という如き実体的二元論の範囲内での「信」の解釈では、到底現代精神に訴えなくなっている(武田龍輔)。	3	-3	3	-27
23	内部弱み アメリカ教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	84	BCA (米国仏教団)の課題は、一番足りないのは、教学である。アメリカ教育というものを我々は確立していないことである(宮地信雄北米開教区フレズノ別院輪番)	3	-2	2	-12
108	内部弱み アメリカ教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	40	真宗の教えをどれ程アメリカの人々が理解できるように体系化するか、今日日本の寺院も、質的に同様な課題に直面していると云えるが、伝統を持たないアメリカの仏教界にとって期かる問題は将来を左右する程の緊急課題である(兼元惠三輪番)。	3	-2	2	-12
22	内部弱み アメリカ教育	阿部 信 『阿部信の伝道学』 CA 阿部信 (1975)	41	浄土真宗をアメリカで発展させようとするならばアメリカ人の心に響く方法で説かなければならない。教えが心に響き身心に共感を与える時、人は自然に念仏の道に入り得る。そうなることは開教使の非常に大きなチャレンジである(原田マービン)	3	-2	2	-12

SWOT分析第2表-内部強み(抜粋)					要旨	重弄性	施策有	宗門全体	評価
分類	種類・対策	出典	頁数						
内部強み	プロセス／お念仏の意味	浄土真宗のこれから	32		教学上は「南無阿彌陀仏」の御念仏は、「信心正因、称名報恩」で救って下さる阿彌陀様に感謝御礼の気持ちで称える御念仏になります。(中略) それをいきなり言うても初めてみ教えに触れる方には、すぐには理解してもらえない。救って欲しいとも救われたいとも思っていない人々に「有り難う」と言えと言っても、そればかりか伝わらない。現代人には「南無阿彌陀仏」は感謝の御念仏だと誤く前に阿彌陀様が私を喚んで下さるお喚び声だと伝える方が理解されやすいのではないかと(前門様)	3	3	3	27
内部強み	プロセス／本尊	平成25年「布教団通信」第85号第4通区布教使研修会 講義録	66		浄土真宗の本尊は、名号本尊が本来であることは百も承知で、海外開教のためにはお木像を本尊とするのが得策であるというの、徳永雄雄助学寮頭のお示しである。なぜなら、お名号を翻訳(意訳)すると長々とした説明文になり、音訳すると意味不明の呪文と受け止められかねないからである。その上でこのお木像の本質は、阿彌陀如来の大慈悲を表しているのと説明するのが開教使の責務であると和上はおっしゃって下さった(徳永道雄)。	3	3	3	27
内部強み	宗教教育	世界に響くお念仏：パキシルディス カッシュン	54		父は熱心な念仏者だった。いつも背中で私達を導いてくれた。私は父の行為の喜びがどこから来るのかもわからなかったが、父に影響されて、長い間真宗を学び、真宗のすばらしさに気づいたとき、父の喜びも理解できた(ハワイ/リリー・ホリオ)。	3	3	3	27
内部強み	Family	世界に響くお念仏：原田マーベリン 著書「アメリカカッシュン」	34		浄土真宗は、Family friendly buddhism (家族みんなが一緒に参加できる仏教)であること。このことは厳しい威達スタイルを重視する禅や手ベットの仏教に比べてアメリカ人にアピールする(原田マーベリン)。	3	3	3	27
内部強み	Family	親愛とアメリカ-北米開教の伝道と教	158		Family, Communityは、神宗と違って浄土真宗はとも強い要素をもっている(ケネス・田中)。	3	3	3	27
内部強み	宗教教育	世界に響くお念仏：パキシルディス	56		5〜6才の頃、両親が門徒で、日曜学校に通って行ってくれ、友達に会いたくてお寺に通った(カナダ/アダム・タダチ)	3	3	3	27
内部強み	アメリカ力教育	世界に響くお念仏：パキシルディス	88		子供の頃から、仏教に触れることが大事。人生の基盤になるから。ゴールデンチェーン(日曜学校の生活信条)をお勤めすること人々に敬意をもつこと老学んだ(カナダ/リサ・サカモト)。	3	3	3	27
内部強み	Family	世界に響くお念仏：パキシルディス	88		両親からお寺に誘われたとき、お寺は私達家族の一部だからと思ったから行くことにした。お寺通いが今ではFamily(家族)の伝統となっている(北米/エミリー・ターナー)。	3	3	3	27
内部強み	社会性	世界に響くお念仏：パキシルディス	84		「プロジェククターナー」は、学問的ではなく南無阿彌陀仏の活動をみんな喜んでいく活動である(ハワイ/近藤翠)	3	3	3	27
内部強み	アメリカ力教育	親愛とアメリカ-北米開教の伝道と教	158		現生性が欠けているとアメリカでは伝道にはならない。アメリカ人は一般的にこの世、現実的な面が強い。教義に戻って「現生正定聚」の教義を強化すべき(ケネス・田中)。	3	3	3	27
内部強み	仏教への関心	世界に響くお念仏：パキシルディス	58		ピント先生の妙好人才市さんの講義を通して浄土真宗に出会った(ブラジル/アンジェラ・アンドラージ)	3	3	3	27
内部強み	プロセス	親愛とアメリカ-北米開教の伝道と教	75		信楽氏等が強調するのは、信仰者の心の転換の過程の問題であり、自分の行為だと考えていた称名の実践が、本当のところは宇宙に満ちる他力の働きに他ならないと覚醒するその転換の過程に注目すべきことである(永富正俊)。	3	3	3	27
内部強み	プロセス／三願	親愛とアメリカ-北米開教の伝道と教	181		「三願転入」は、行者に取って弁証法的転換であるといえる。	3	3	3	27
内部強み	プロセス／三願転入	浄土和語64番、86番(注釈版聖曲)	567-8		化身土文類の三願転入は宗祖の美徳的必然の観点からの表現であるのに対して、第20願のご和讃は、本願、本願力の視点からの表現になっている。そこでは念仏は必然の前提となっていることが知られる。	3	3	3	27
内部強み	本願	世界に響くお念仏：パキシルディス	80		浄土真宗の救いは、ひとえに阿彌陀様の本願の働きである(徳永一進)。	3	3	3	27
内部強み	仏教への関心	親愛とアメリカ-北米開教の伝道と教	38		儀礼・作法は、ただ仏徳讃嘆のためだけでなく、仏門へ導く大きな力を持っている(小谷政雄)。	3	3	3	27
内部強み	本願	不願寺白濁祭：徳永一進「教えを」	88		人生の現実にも適用される教えは、行信論に限られない。素朴な本願、第3願、第4願が適用されている(徳永一進)。	3	3	3	27
内部強み	本願	不願寺白濁祭：徳永一進「教えを」	88		初歩的な仏教・真宗の知識を教わっただけでなく「後生の一大事」の場面にそれを用いて、自らの「後生の一大事」の場面の新しい局面を切り開いた卒業生達が居る(徳永一進)	3	3	3	27

SWOT分析第3表-外部機会(抜粋)		種類・対象	出典	頁数	要旨	重要性	構築性	宗門全体	評価
66	外部機会	仏教への関心	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	186	妙好人の味わいが結構、白人・黒人の求めているものにも合う(小杭好臣北米開教教区元総長)。	3	3	3	27
165	外部機会	伝道	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	28	(伝道を効果的に行うには) ◆聖典翻訳(Text翻訳)のみならずContext(=人々がお法に遇いお育てに遇い)という人生を送ったか、お聴聞の姿)も翻訳の対象(マイナー・リー・ロジャーズ)。←妙好人逸話がこれに該当する(堅田 玄香)	3	3	3	27
136	外部機会	伝道教学	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	166	浄土真宗には、二種法身とか親身という考え方があり、キリスト教の神の見方よりもっと現代化し、現実的に話していける可能性が沢山ある。キリスト教よりも浄土真宗の方がもっと可能性がある(ケネス・田中)。	3	3	3	27
21	外部機会	カウンセリング	世界に響くお話 仏：原田マーベリン 提言2「アメリカ」	41	仏教カウンセリングセンターでは種々の人生問題に関してユニークなブディスト・カウンセリングをやる(原田マーベリン)	-3	3	1	9
16	外部機会	宗教教育	世界に響くお話 仏：原田マーベリン 提言2「アメリカ」	35	オレンジ郡仏教会では、BECという勉強会プログラムを通じて、一般にも門戸を広げてやっており、仏教に興味がある新しい人たちが寺院に招くことができる機会である。そこから新しい人、初心者が増えつつある(原田マーベリン)。	3	3	1	9
17	外部機会	伝道	世界に響くお話 仏：原田マーベリン 提言2「アメリカ」	35	オレンジ郡仏教会にやってくる人たちの多くは、HPを見て来る。寺院が効果的なHPを持つことは、今日の情報化社会においては大変重要なことである(原田マーベリン)。	3	3	1	9
18	外部機会	誤解	世界に響くお話 仏：原田マーベリン 提言2「アメリカ」	38	アメリカ人は、「仏教」イコール「メデイテーション」と思っている。メデイテーションは、念仏紹介の入門の機会として効果的である。「間法の態度」をつくるのが大事である(原田マーベリン)。	3	2	1	6
127	外部機会	瞑想	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	47	瞑想(メデイテーション)を取り入れ、国連と密接な関係を持ち、仏教に対する現代社会の要請に応えている。地域的規模で国連の場を通して仏教者として社会の諸問題の解決に向けた提言をしている(中垣 顕賢)。	3	2	1	6
133	外部機会	教学/他力	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	167	西欧では、空の思想しか大乘仏教にはないと見ている人が多いが、他力的な要素は大乘仏教の根本であり、親鸞の思想も注目すべきという学者(中垣)もでてきている(ケネス・田中)。	3	1	1	3
122	外部機会	伝道	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	45	アメリカ文化の中で、本当に宗教的になれるものが発揮できるかが真宗伝道の鍵であり、都市近郊の人々の大きな関心である家族と教育のニーズに応える伝道の工夫が必要(日系3世：ラッセル浜田)。	3	1	1	3
68	外部機会	ブライティス	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	197	開教伝道にとって難行難修の道は大切な大事な道である(小杭好臣)。	3	1	1	3
139	外部機会	ブライティス	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	157	禪真僧伽はまずブライティスを前面にもってきてそれから真宗の方へ導いていこうという考え方だ(ケネス・田中)←お聴聞のための準備段階という明確な目的意識のもとにのみ許される。	3	-1	1	-3
3	外部機会	仏教への関心	世界に響くお話 仏：原田マーベリン 提言2「アメリカ」	31	アメリカでは95%がキリスト教徒であるが、多くのキリスト教徒は伝統から去って異なる教えを探している(原田マーベリン)	3	-1	1	-3
126	外部機会	伝道	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	47	日本から若い伝道者が増えてと頻りに伝道未開の地を訪れ、時と場所を違はず開法迅速の輪を広げお念仏の法門を伝道実践していくべき(辻 顕隆)。	3	-1	1	-3
59	外部機会	仏教への関心/ブライティス	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	173	アメリカ人は、仏教を求めるときに、実践(Practice)というものに引かれる(ケネス田中)。	3	-1	3	-9
124	外部機会	伝道教学/独自性	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	46	アメリカ社会で真宗が流布していく上で特に重要な課題は「我」と「死」に関するものである。キリスト教徒の対比を含めて、仏教・真宗の独自性がどこにあるかを鮮明に打ち出して行かねばならない(辻 顕隆)。	3	-3	1	-9
170	外部機会	伝道	娯楽とアメリカ-特別講義「白人・黒人伝道の可能性と」	72	異文化間のコミュニケーションの達成は、宗教的洞察を記述する言語の内面性や志向性が第三者にはつきりと理解されて初めて可能になる。	3	-1	3	-9

SWOT分析第4表-外部脅威			要 旨	重要性	施策有	宗門全体	評価	
分類	種類・対策	出 典	頁数					
152	外部脅威 教学	親鸞浄土教とキリスト教、眞宗・キリスト教シンポジウム	39	親鸞浄土教の全容に対して、西洋的方法論で各分野から西洋学者一流の最大限の批判的究明が親鸞教学に対してなされていくとき、果たして従来の行信論・仏身論・名号論・本願論・往生論で以てまともな太刀打ちできるか。心密かに愛いを感じ得ない(武田龍精)。	3	-3	3	-27
153	外部脅威 教学	親鸞浄土教とキリスト教、眞宗・キリスト教シンポジウム	40	国際会議に於ける猛烈な議論の中に身を置いて常に感じて常に批判や否定的意見を明確に言明する(武田龍精)。	3	-3	3	-27
154	外部脅威 教学	親鸞浄土教とキリスト教、眞宗・キリスト教シンポジウム	40	国際会議で大いに議論ができるのも、必ず発表者のペーパーに対して一人乃至複数の批評者が付き、応答することである。決して発表のやりっ放しで終わってしまうのではない(武田龍精)。	3	-3	3	-27
183	外部脅威 伝道	南米開教区松峰 総長との談話		「近頃は、いろんな新興宗教が日本から仏教の類をしてやってきて活動するものですから、今ではご門徒さん連にとっても何か本場の仏教かわからなくなってきたり困っています。」と承りました。伝道最前線で宗門が脅威に晒されている実情が読み取れます。	3	-3	3	-27
184	外部脅威 伝道	伝道最前線(末寺での華別)		最近末寺にさえも直接新興宗教の勧誘が入る(例、エホバの塔)。甚だしきは御門徒のご法事で帰郷し御法話を聴聞の後お寺まで住職を送り届けた際に「先生ぜひ読んで下さい」と言って「ラルロの大風を乗り越えろ(例：真光教団)。	3	-3	3	-27
86	外部脅威 伝道方法	親鸞とアメリカ・BCA東部調査(18ヶ寺)	33	キリスト教の伝道方法は大変熱心である。われわれはもっとそこから学ばなければならぬ(大内定彦)。	3	-3	3	-27
179	外部脅威 国内伝道最前線	平生、眞宗宗教団連合送迎委員会、委員研修会講演記録X	43	別院に行ってお話を聞くけれども仏法の話がない。どうして親鸞会のような分り易い話をしていないんだ(p42)。親鸞会で話を聞いたことがあるけど、あんな熱心な人連はいなかった。本願寺の人は普段仏法の話をして聞かれない、仏法の話をして聞かれないという住職まで居る。親鸞会では、何をしても仏法の話をして聞かれない(p43)。	3	-3	3	-27
185	外部脅威 国内伝道最前線	住職から見た浄土眞宗他院の姿		浄土眞宗の五寺とその御門徒集団は歴史的なお隣りのコミュニティの姿では既に無く、お隣りを第一目的に掲げた活動は形を渡り、固定的な彼岸会や親恩講の御法理に限って形式的な営みが続いているのが近隣他院の実情である。これが共通のコミュニティの基礎を形成する。	3	-3	3	-27
186	外部脅威 国内伝道最前線	住職から見た浄土眞宗他院の姿		浄土眞宗の五寺とその御門徒集団は歴史的なお隣りのコミュニティの姿では既に無く、住職連中が自坊も含め、お隣りの姿を示すことがなく、御門徒さんに御法理の案内をしても私は他院の門徒ですからお参りしないというのが実情である。これが共通のコミュニティの基礎の上に構築される。	3	-3	3	-27
141	外部脅威 社会性	親鸞とアメリカ・北米開教の伝道と教	158	アメリカでは、宗教は現実役に立たない、本場の宗教ではないという観念が強く、具体的な課題について私の宗教ほどのような正しい道を教えてくれるかを要求してくる。例) 妊娠中絶の問題(ケネス・田中)。	3	-2	1	-6
142	外部脅威 社会性	親鸞とアメリカ・北米開教の伝道と教	158	浄土眞宗に基づいた倫理という考え方はない。アメリカでは「私は浄土眞宗です。中絶のことを考えています。どう思いますか。これに浄土眞宗が応えなかったら、私は他の宗教へ行きます」となる(ケネス・田中)。	3	-2	1	-6
6	外部脅威 仏教への関心	世界に響くお港 仏：原田マレーン 福音2「アメリカ	32	仏教徒に改宗したアメリカ人に二つのタイプがある。一つは若い人たちがかなり広がっている禅、チベット仏教、創価学会である(原田マレーン)。	3	-1	1	-3
132	外部脅威 教学/誤解	親鸞とアメリカ・北米開教の伝道と教	155	西欧の学者、伝道者、教科書には、浄土眞宗は正式の仏教ではないという誤解と偏見がある。例) Outrageである(Julian Gray)、Defact Buddhism(コウ・ウイリアム)、Is it Buddhism?(リカス) 等という誤解と偏見がある(ケネス・田中)。	3	-1	1	-3
114	外部脅威 アメリカ教学	親鸞とアメリカ・BCA東部調査(18ヶ寺)	42	インターナショナルは、大きな可能性を秘めているが、教えが納得して理解されないと簡単に他の宗教に移るアメリカでは、アメリカ人を納得させる教えと●伝道方法が必要(青山藏之)。	3	-1	1	-3
49	外部脅威 瞑想	世界に響くお港 仏：パウルティン カウツション	104	メディアレーションが自分の中に仏性を見つけてしまうという危険。瞑想の中から何か真理を見いだそうとするとお隣りがどこかにいつてしまっている危険である(徳永一彦)。	2	1	1	2
175	外部脅威 伝道教学	眞宗伝道学方法論の考察-眞宗教義と伝道学の	238	キリスト教会は、その歴史の最初から伝道に教義的基礎を与え、熱心に行ってきた。教会の歴史は伝道の歴史である(p238)(深川直暢)。	3	1	3	9